

中に出して欲しい時がある。動物的で原始的な生殖行為が、私にとっては最大の興奮の材料になるのだ。

.....

「で、本題は？」

夕飯のお皿を片付けていた私は、後ろから声をかけられて、振り返りながら首を傾げた。

「え？何よ、あれだけ食べたのにまだ足りなかった？冷凍庫にアイスならあるけど」

「イイねー、食う。いや、じゃなくて。なんで俺ってお前に家に呼び出されて、腹い

っぱい美味しい飯食わされてんの？俺の好物ばっかだったけど、今日ってなんの日？」

「えー？んー。別に？深い意味は無いんだけど・・・」

私は視線を泳がせながら、無意識に口を尖らせた。

「・・・お前は本当に嘘をつくのが下手くそだな」

物心つく前からの幼馴染で、大人になった今も縁あって隣に住んでいる琉生は、呆れたように半目になった。

「言ってみろ」

琉生はあぐらをかいたまま胸を張った。

「何か頼みごとがあるんだろ？」

目に掛かる程の伸びっぱなしの髪をガシガシとかきながら、口をへの字に曲げる。

「飯の恩くらいなら、返してやるよ」

「琉生……」

私が密かに感動していると、琉生は「面倒なこと以外だぞ」と付け加えてきた。琉生って飄々としているせいで一見薄情そうに見える事もあるけど、実は情に深いところがあるんだよね。まあ、知っているからこそ、琉生にこんな事を頼もうと思ったんだけど……。私は冷凍庫からアイスを取り出し、琉生へ手渡しながらゆっくりと口を開いた。

「琉生ってさ……彼女居なかったよね？」

「は？何だよいきなり……んー、まあ……そうだな」

てつきり「いない」と思い込んでいただけに、その曖昧過ぎる返事に驚いた。

「え！？ちょっと何よその生返事！え！？いるの！？お付き合ひしてる相手がいるわけっ！？」

私の計画に関わる重大な事なのだ。私はズイッ！と身体を前のめりにして、琉生に食いかかった。いきなり大きな声を出したせいで、目を真ん丸にしながら驚いていたが、直ぐに首を大きく横に振った。

「い、いねえよ！いねえけど・・・だから何だよ？それがどうしたんだよ！？」

益々怪訝そうにしながらも、アイスの袋を開ける琉生。私はホッとしながら、お茶を飲んで口の中を潤した。

「じゃあさ、じゃあさ、好きな人も居ない？」

「はあ?? お前も知ってんだろ? 会社立ち上げたばかりでそんな余裕ねーって。つか何なんだよさつきから。意味分かんねー」

かき氷のアイスをつたの三口でガリガリと食べ終えた琉生は、アイスの棒を咥えたまま、ジト目で私の事を見ている。

「・・・危ないコトはしねーぞ?」

おっと。石橋を叩き過ぎて完全に警戒されてしまった。そろそろ本題に入ったほうが良さそうだ。緊張からコクリと喉が鳴るが、話さなければ先には進めない。私は覚悟を決めて、ゆっくりと話し始めた。

「あの子・・・?」

「おう」

私の真剣さが伝わったのか、琉生も啜っていたアイスの棒を机の上に置いた。もー！汚いなあ！直は駄目でしょ直は！と、言いたい所だったけど、でもこれから大切なお願いをする事になるから、文句はグツ・・・！と飲み込んだ。

「私の事、生理的に無理だったりする？」

「あ？何だそりゃ？」

琉生の眉がめちやくちゃハの字になってる。

でもこれは大切な確認事項になるので、もう一度聞いた。

「良いから！どう？私のこと、触るのも嫌だったりする？」

「はー？？何だよその質問・・・あーもう！分かった分かった！答えりゃ良いんだろ

答えりゃ！そんな睨むなよな・・・別にそんなこと思わねえよ！」

「それって触れるってこと？」

私の質問の意図が分からないらしい琉生は、妙な顔をしながらも曖昧に頷いてくれた。

「まあ・・・？」

良かった！これで言質は取れた！私は琉生にズイッ！とにじり寄った。琉生は怯んだように身体を反らせている。

「さっきから何なんだよ・・・！？」

琉生は戸惑っているが、私は目的達成を目前にガッツポーズを決める。そしてついに、目的を果たすことにする。

「琉生さ、私に・・・中出ししてくれない？」

私の「お願い」を聞いた琉生は、奇妙な顔をしたまま固まってしまった。聞こえてないといけないので、念の為もう一度伝えておく。

「中出し。してくれる？私に」

「・・・どっかに頭ぶつけたのか？」

これでもかという程に顔を顰めた琉生に、私は大真面目な顔で首を横に振る。

「ぶつけてない！正気も正気！一生のお願い！だから、ね！？良いでしょ！？お願い！中出しして！？」

「バーバーカ！お前の一生のお願いなんか既に五千回は聞いたわ！つかそんなレベルの願い事じゃねーだろ！」

思ったよりも拒否されていることに若干傷付きながらも、私はめげずに交渉を続ける。

「お願いお願い！こんな事頼めるの琉生しかないんだってば〜！」

「お前・・・そういう事は彼氏に頼めよ！」

至極真つ当な事を言われているのだが、それは無理だった。

「無理！今居ないの！」

「はー？この前までいたろうが！俺のことすげー睨んできてた束縛強そーなやつが

よ！」

「一ヶ月前に別れたの。浮気されちゃった・・・自分はめっちゃくちゃ束縛してきた癖に・・・」

一気に表情を曇らせた私に、琉生は哀れむような顔になった。ふっふっふ、同情してる・・・琉生は優しいから、この手の理由なら流されてくれるのではと予想していたのだ。

まあ、浮気されて別れたのには何の脚色もないけど。

「おお・・・」

別れた理由を聞いて言葉を詰まらせた琉生に、畳み掛けるようにしてお願いを続けていく。

「大丈夫！琉生は中に出してくれただけで良いし、ちゃんと気持ち良くしてあげるか

「..」

「・・・お前なあ！」

まだ抵抗を見せようとする琉生に、私は秘密兵器を出すことにした。

「タコつぼ！」

「？何だよ急に、何の話・・・」

「数の子天井！」

「・・・ッ！？」

「ミミズ千匹！」

「お、お前それって、もしかして・・・!?」

「はい！元彼達からの評価です！」

「ツツツ!!・・・いや・・・でも・・・あ

ー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・お前は俺で良いのか

よ?」

長かったけど・・・はい！落ちました！琉生って昔っから食べるの好きだし、よく寝てたから、なんとなーく性欲も強いんじゃないかなーと思ったんだよね！ま、琉生も

健全な男の子ってことすな！ハッハッハ！

私は勝利を目前に堪えきれない笑みを浮かべながらコクコクと頷いた。

「中出ししてくれるならもう・・・誰でも良い！」

眼を焔めかせながら元気よく即答する私に、琉生はげんなりしたような顔をして項垂れた。

「・・・俺が言うのも何だけど、お前はもっと自分を大切にしろよ。おばさんが泣くぞ」

しかしそんな事を言っても、琉生のズボンが少し反応してるのを私は見逃さなかった。

「うん。だからお母さんには内緒にしといてね」

ズボンにそっと手を伸ばせば、ほとんど呆れたような顔をされたが、しかし抵抗はされなかった。

「・・・キヤー、オソワレチャウー」

変な裏声で形ばかりの抵抗？を見せる琉生を、私は軽く睨み付けた。さっきお高い鰻まで食べさせたのだから、その分は働いてもらわなければ。

「そんなこと言いながら、話だけでこんな膨らませてるやつには言われたく・・・  
な・・・い？あれ？」

緩く芯を持ったそれに触れた途端、私はちよつと言葉に詰まった。だってこれ・・・

「えーつと？んー・・・？琉生、なんかこれ・・・おつきくなあい？」

私は自分の手首と同じくらいある<sup>ニ</sup>それ<sup>ニ</sup>から、ゆつくりと手を離そうとした。すると、私の手の上から琉生の手が重なり、包み込むようにしてその凶悪なものを再び握りこまされた。ガツツリと手に取らされると、本当に大きい。あり得ないくらい太い。しかも私が握ると、更に硬さを増した。やだあ、怖あい！

「ちよつとつと、待って・・・いや、力強っ！」

離そうとしても、離させてもらえない。

「良いじゃねーか。勃たせろよ。スるんだろ？」

ここにきて急に積極的になった琉生に、私の方が逆に気持ちを追いつかない。こんな相手にしたら、ガバガバになっちゃう・・！ていうか・・

「嘘でしょ！？これまだ勃ってないの!？」

怯む私とは対象的に、琉生はニヤニヤとした笑みを浮かべる。

「何だよ。ビビってんのか？」

小馬鹿にするように揶揄われて、私はムツとする。だって、琉生よりは経験があると

いう自負があったから。

「そんな訳ないじゃない・・・！こんな・・・こんな大っきなおちんちんの一つや二つう・・・！」

でも、琉生の手で強制されている手コキにより、ムクムクと膨らんでいくそれに、私の心は早々に折れた。

「ねえええ・・・おつきいよおお・・・これおつき過ぎるよおお・・・こんなので犯されたら、ガバまんになっちゃうよおお！」

明らかにテンションの下がった私に、琉生は大きなため息をついた。

「ハァー・・・お前なあ。ここまで煽つといて秒で引くの止めろよ」

琉生のものは最早手のひらでは包み込めなくなっていた。

「だって……こんなの……入んないってえ……！」

ムラムラしていた筈の私の性欲は、今や影も形も残っていない。

「だってこんなの……棍棒だもの！性器じゃないよ！凶器だよ！」

「何バカ言ってるんだよ。大く丈夫だって」

琉生の適当な返事に腹がたったのと、信じられない言葉が続いたのは、ほぼ同時だった。

「じっくり慣らしていけば、明日の夜までには根本まで啜え込めるようになってる

よ」

「・・・いや！今！まだ今日の夕方なんですけど!？」

丸一日以上、アレやコレやをするつもりなのか!? 私は本格的にこの場から離れる事を決めた。

「あー・・・あ!ごつめーん!今から親も帰ってくるし、今日の所は解散ということ  
で良いかなあ!？」

「あ?おばさん連休だから、今朝から三泊四日で箱根に旅行って言ってたけど」

ああー!幼馴染の情報網舐めてたあああ!気を取り直して・・・作戦変更!

「ウンウンソーダネー。ソーダッター、シツネンシテター・・・あ!ちよつと今日は  
女の子の日だった!ごめんごめくん!たった今なったばかりで!ごめーん!」

「ホー？フーン？へ〜？」

「え、ちょ、ちよつと・・・！？」

琉生はヒョイと私を持ち上げると、そのまま膝の上にストンと座らせた。いや、当たってる・・・存在感凄いのがお尻の下にいるよおおおお・・・。

ーーーースルリ

「ッ！ひゃあ！？ちょ・・・！？何してんの！？」

琉生は何の躊躇いもなく人のスカートの中に手を滑り込ませてきた。いくら幼馴染といえども人のスカートに断りもなく手を入れるのはルール違反じゃないかなあー！？

「ちよ、ちよ、ちよ・・・手が、手が入ってきてますよ・・・!？」

止めなきやと思うのに、でもいきなりの事にビックリし過ぎて琉生の手の動きを目で追うことしか出来ない。琉生の指はスルスルと太腿を伝って、あっという間に真ん中へと降りていってしまった。そして躊躇うことなく下着の隙間から、指を差し込まれた。

ーーくち・・・♡

「ひうッ!？」

小さな小さな水音。何かを確かめるようにピタピタと押し当てられた指は、すぐに出てきた。そしてそのまま、目の前まで持ち上げられる。

「おーこりゃ生理前で間違いないな。ハハ、すっげー雌臭え♡」

はしたない体液で濡れた指を、無遠慮に見せつけてくる。私は時間差でジワジワと顔が赤くなっていく。嘘がアツサリ過ぎる程あつという間にバレたのもそうだし、物心つく前からの幼馴染に、大切なところを晒していることにも今更ながらに羞恥を感じる。引き抜いた指をじっくりと観察しながら、琉生は私の肩に顎を乗せてきた。

「なあ、キスする？」

唐突に呟かれた一言に、ほんの少しだけドキリとした。でもそう感じたこと自体が何だか気恥ずかしくて、それを誤魔化す為に、私は敢えて「アハハ」と明るく笑った。

「いやいや！キスはやっぱり付き合ってからじゃないとね！」

「いや普通逆だろ・・・でも、ま、了解〜」

何の感情も含まれていなさそうな短い返事に、ちよつとだけホツとした。ん？何でホツとしたんだろ・・・？でも、そんな事を考えている内に、琉生の指が口の中に突っ

込まれたから、その時に考えていたことなんて、すぐに忘れてしまった。

「じゃあ、口ん中は指で弄んぞ」

「はへ？ひよ・・・ひよっほ・・・？」

いきなりおっぱじめられた感に、聞きたいことがいくつもあったのだが、琉生の指が私の上顎をスリスリと優しく擦ってきたので、何一つ言葉に出来ない。そしてその内、私の身体には明らかな異変が起こり始めた。

「ん・・・ア・・・ン・・・？ふう・・・うゝツ・・・？」

自分でもビックリだ。琉生の指で口の中を犯されていると、鼻についた甘え声しか出てこない。

「・・・口ん中弱いな」

「ほ、んなほと・・・なひへろお・・・」

口の中が気持ち良いと感じたことなんて、今までの経験上一度として無かった。でも  
琉生の指が私の舌を捉えて、クニクニ、グニグニと弄り始めると、私の口からはとん  
でもなく甘い声がひっきりなしに溢れはじめた。

「ンンッ・・・はへ・・・もふ、ゆひはは・・・ゆひは、らめえアツ・・・オ

オ・・・んへえ」

「ハハ。駄目な顔じゃねえだろ。早くも下品なエロ声でてるけど、彼氏でも無え男に  
聞かせて良いのかよ？」

いつもであれば、琉生が触るからでしょ！というツッコミも出来たのだが、舌を親指  
でグリグリと揉みこまれると、もつともつとと言うように、自ら舌を差し出してしま

う。

「あ、へえ……？ンンッ……らっへえ……ひいんらもおん……」

とろんとした眼で見上げれば、琉生の指がピタリと止まった。

「……ヤバ。想像より断然エロ過ぎてビビるわ。中出し強請ってくるだけのことはあんなあ。もしかしてゴックンも好き？」

「？」

回らない頭の中で考えて、そして、返事の代わりに指をチュクリと吸った。大きく口を開けて、口の中で動かなくなってしまった琉生の指をペロペロと舐める。

んー？全然動いてくれなくなったな？私は一旦自分で指を引き抜く。

「ぷは・・・ん、舐めるのは好きなんだけど、でもゴックンはしたこと無いかも」

歴代の彼氏達は口でするよりも挿入する方が好きだったから、あまりおしゃぶりはさせてもらえなかったのだ。

「・・・へー」

「ングううッ・・・!?!」

低く呟かれたその返事は、私の悲鳴のようなうめき声にかき消された。いきなり二本の指を喉奥まで突っ込まれて、私は嗚咽しながら身体を震わせる。

「これ練習。嘔むなよ？本物は指より太いんだから」

琉生は冷静に何やら説明してくるが、一方の私は口の中いっぱい突っ込まれた指に

責められて、思考はぐちゃぐちゃだ。一切の余裕の無い私に、琉生は口の端からダラダラと零れる唾液を舐め取ると、喉にチュクリと吸い付いてきた。

「ここで俺のちんこ扱いて気持ちよくして、挿れてもらうための準備すんだぞ？」

ここっでもしかしなくても・・・喉ですか!?(泣)グリグリと指を突っ込まれて、苦しき以外の何物も無くて、普通にペソをかいてしまう。

「ぐ、ぐうゝ・・・、ツグス・・・ぐう・・・」

「どうした？苦しいか？」

何を当たり前の事を・・・！私は顔をくしゃくしゃにしながらコクコクと頷く。

「じゃあまずは喉からだな」

・・・何が！？とツッコみを入れる間もなく、琉生の手が耳をスリスリと撫でてくる。

ピーピーピクッ

「？」

何か一瞬変な感じがした。

琉生は私の表情を観察するように見つめながら、ゆっくりと身体に指を這わせてくる。首筋、鎖骨、腕、胸の間。クリとか胸とか、いわゆる性感帯以外は触られても大して感じたことが無かったのだが、今日は何故だが指が滑る度に身体が大きく跳ねる。ゾクゾクとした刺激が身体中を駆け回り、先程からずっと鳥肌が止まらない。

「俺に触られるの嫌い？」

唐突に尋ねられた。嫌いも何も、こちらからお願いで触ってもらっているのだし、それにどちらかというと、今までにないくらい気持ち良い・・・気がする。私はフルフルと首を横に振った。そんな私を見て、琉生は薄っすらと笑った。

「ん。じゃあもつと触るけど、良いよな？」

こちらに判断を委ねるような言い方だったのに、琉生の手はもう既に服の中へと侵入してしまった。遠慮なしに潜り込んできた指で、下着の線に沿ってスリスリとなぞられると、指を咥えさせられている口からは、ほんの少し艶の混じった声が漏れ始めた。

「ん、う・・・？」

戸惑う私に、琉生は口角を上げながら瞳を細める。

「へえ〜・・・思ってたより良い顔すんなあ」

感心したように呟く琉生。

何一人で余裕こいてんだ！ちょっとだけ痛い目にあわせてやる！と思った私が、ガ  
プ、と手加減しながらも噛みつけば、急に身体に電撃が走った。

「キヤウツ・・・！」

「悪いことする奴にはお仕置きー」

キツく摘み上げられた胸の尖りに、私はジワリと冷や汗をかく。

「ヒツ・・・たいい・・・！」

「もうするなよ?。」

琉生から叱られた私は素直にコクコクと頷いた。

え、琉生ってこんな悪<sup>ニ</sup>を感じさせる人だったっけ？あれかな、車に乗ると性格変わる人いるけど、それと同じ？エッチの時はSになる、とか？

というかそんな事を考えている場合じゃない！私が涙目のまま『許して』と視線で訴えれば、「はあく」と溜息をつかれてパツと指を離された。

「ツ・・・うう、まだ先っぽがジンジンするう・・・んムウ！」

「歯は立てんなよ」

再び口の中を指でクチュクチュとイジられながら、先ほど抓られて未だジンジンと疼く胸の先を、今度はそっと撫でられた。

「ア、ひう・・・」

振り上げられて敏感になったからなのか、表面をほんの少し触れられているだけなのに、ビリビリとした刺激に身体が跳ねる。指で挟まれてクニ、クニ、と弄られたり、指の腹でスリスリ、と撫でられているうちに、どんどんとお股が切なくなってきた。それに合わせて口の中の指も、上顎をスリスリと擦って甘い快樂を与えてくる。

「オ、ア……ンお……は、ア……ンン……♡」

気付けば私は、自ら指に吸い付きながら舌を絡ませていた。胸をクリクリとこねくり回されながら喉の奥まで啜え込むと、頭の芯までポーツとしてくる。

「気持ち良くなってきたろ」

琉生の言葉に、ポーツとしたままコクリと頷いた。新たな扉、開いちゃったなあ、なんて思いながらも、味のしないそれでは満足出来なくなってきたのもまた事実で……。もしかして琉生ってエッチが上手いんじゃ……。期待に視線が落ちたの

は、直ぐにバレた。

「ハッ・・・もう欲しくなった？」

私は一瞬躊躇しながらも、もう一度コクリと頷いた。しかしボロン、と飛び出したそれを実際に見てしまうと・・・

「あ、ごめん！やっぱ無理！」

もう一度琉生のそれに対峙した私は、急に正気へと戻った。うん。これは無理だわ。危なかったー。良かったわ、早めに意識が戻って。

「・・・は？」

琉生の声が強張る。が、私の気持ちにはもう余裕など無い。つまるところは・・・ま

たもや怖気づいてしまったのだった。

「うん。これは無理だわ。挿入しない。え、というかさ、さっきより大っきくなってない？ということ、さっきより無理になってるわ。無理よりの無理。あー、ごめんなんだけどその凶器、一旦仕舞っといってくれる？眼の毒だから。見てるだけで孕みそうだもん。危険危険」

私が一人でベラベラと喋っている内に、琉生のこめかみに青筋が浮いた。あ、ヤバイ。流石に喋りすぎた？

「おー。分かった・・・OK。ぜってー犯す」